

ニッポンを伝える

—通訳ガイドのライフヒストリーとその「芸」

Introducing Japan: A study of life-history and the art of narration of English speaking tour guides in Japan

鵜飼正樹 京都文教大学総合社会学部教授

Masaki Ukai, Kyoto Bunkyo University, Faculty of Social Relations

日本政府は2010年に訪日外国人観光客を1000万人にする訪日旅行促進事業、ビジット・ジャパン事業を2003年に開始した。その後、順調に訪日外国人観光客は増加し、2007年には800万人を突破するにいたったが、2008年のリーマンショックを機に急減、2009年には679万人にとどまった。とはいえ、21世紀は国際観光が「人の移動」にとって大きな位置を占めることは、疑いない。

本研究では、この訪日外国人観光客を「ガイド」として案内するプロである、通訳ガイド（通訳案内士）に焦点を当て、外国人観光客が非常に少なく、富裕層に限られていた終戦直後から、観光が大衆化した1960年代、さらに個人旅行者が増加し、格安ツアーが一般化した現在までを、通訳ガイドの視点から検証することが第一の目的である。とりわけ、自身の目で観光客の変化を見つめてきたベテランガイドのライフヒストリーとその「話芸」に注目して、彼らが外国人観光客に対してどのように「ニッポン」を「見せ」「語って」きたのかを解明したい。

In this study, I aim to describe the change of foreign tourists in the age of post war Japan from the view point of English speaking tour guides. Especially, using life-history method and recording their art of guiding technique and narration, I intend to investigate how they introduce Japan to foreign tourists.

1. 研究目的

グローバル化が進む現代社会における「人の移動」のあり方として、きわめて大きな位置を占めるのが、観光である。社会学・文化人類学においては、1990年代以降、観光の研究は急速に進んだ。日

本人の海外旅行についての研究は相当の蓄積があり、最近も山口誠が『ニッポンの海外旅行』で、海外旅行のガイドブックを分析している。しかし、外国人の日本旅行に関する研究は乏しい。それはおそらく、経験や資料が本国に持ち帰られ

たまま、日本に戻ってくるのが少ないからであろう。

本研究は、観光の社会的・文化人類学的研究に、「ガイド」という視点からアプローチする。訪日外国人旅行の最前線で外国人に接する「通訳ガイド」という職業に携わってきた人びとのライフヒストリーを記録し、インタビューや資料によって彼らが伝えようとした日本像を検証し、彼らの目から見た訪日外国人旅行者の変容を戦後社会史の中に位置づけることをめざしている。

2. 研究経過

本研究は、当初、以下のような計画で進める予定であった。

(1)ベテランの通訳ガイドを訪ね、自身のライフヒストリーと、通訳ガイドとして見てきた訪日外国人観光客の変化、旅行エージェントとのネットワークの形成、自身のガイドング技術の特徴を中心とするインタビューを実施する。とくに、現在70歳以上、1960年代以前に通訳ガイド資格を得て、海外旅行の大衆化時代から活躍してきた人たちを中心にする。

(2)関係者の所蔵する写真や資料をデジタル化し、保存する。

(3)国会図書館や観光庁、国際観光関連団体(JNTOなど)、旅行代理店(JTBなど)、通訳ガイド団体、旅行業界紙・誌発行会社などで、訪日外国人観光客に関する資料を収集する。

(4)現役通訳ガイドのツアーに同行し、ガイドングの現場を映像で記録し、その「芸」を分析する。

研究期間の配分としては、前半(4月～

9月)はインタビューと資料収集に集中し、後半(10月以降)は収集したデータの分析を中心とする予定であった。

しかし、2011年3月に起きた東日本大震災と原発事故の影響で、訪日外国人観光客は激減し、通訳ガイドを含むインバウンド業界がかつてない混乱に見舞われたため、調査どころではなく、年度の前半はほとんど研究活動を実施できなかった。

ようやく8月に入り、上記の(1)について、すでにガイドを引退しているT氏へのライフヒストリーを中心とするインタビューを実施した。T氏は1946年生まれ、現在は三重県内で観光業にたずさわっているが、1990年代初めまでは、京都でもっとも評価が高かった通訳ガイドの一人である。

以後2012年3月までに、以下の3名の通訳ガイドのライフヒストリー・インタビューを実施した。

H氏。1931年生まれ。京都で長くJTBの専属ガイドをつとめ、退職後は京都ではじめてのウォーキング・ツアーを開始。ツアーはガイドブック『ロンリー・プラネット』の日本編などでも紹介され、毎年合計3000名近くの客を集める人気となっている。

S氏。1932年生まれ。1951年に、高校2年という当時最年少でガイド試験に合格。かつては「日本一のガイド」と評判をとり、スペインの皇太子(現国王)など著名人が日本を旅行するさいのガイドに指名された。通訳ガイドの労働条件の向上をめざして「全日本通訳案内士連盟」を結成し、初代の会長をつとめた人物でもある。

A氏。1948年生まれ。JTBの専属ガイドとしては、最後の世代。2009年から、京都市内でのウォーキング・ツアーを開始した。

以上に加えて、ジョー岡田氏（1929年生まれ）には、助成以前からインタビューを継続している。

(2)に関しては、上記のジョー岡田氏、S氏よりアルバム、写真などをお借りし、デジタル化を進めた。また、H氏からもガイド料金についての内部資料など、非常に貴重な資料を提供していただいた。

(3)に関しては、京都を中心とする関西の図書館で資料を収集するとともに、2012年1月に上京し、国会図書館で資料を収集した。

(4)に関しては、2012年1月以降、私自身がさまざまな外国人観光客向けツアーに参加してデータを収集するとともに、京都大学の留学生にモニターとしてツアーに参加してもらい、ツアー終了後にガイドをまじえて感想を聞くという方法で、実施した。また、京都文教大学の学生の協力を得て、一部のツアーのガイディングの様態を録音・録画した。

参加したのは以下の5つのツアーと1つのショーである。

①はとバスの東京モーニング・ツアー

②ALL STAR OSAKA WALK TOUR

③KYOTO TWILIGHT WALKING TOUR

④NIGHT TIME EXPLORATION IN ELEGANT GION DISTRICT TOUR

⑤WALK IN KYOTO TALK IN ENGLISH TOUR

⑥THE LAST SAMURAI SHOW

以上のツアーのうち、③は上記のA氏が、⑤はH氏がガイドするツアーである。また、②と④は、1970年代生まれの若いガイドが案内するツアーである。⑥は、ジョー岡田氏の代名詞ともなった「サムライ日本ショー」のダイジェスト版で、ジョー岡田氏自身が演じる、居合を中心にしたショーである。

またジョー岡田氏には、特別にお願いして、1971年より1990年まで20年以上にわたって挙行され、のべ13万人以上の観光客を集めた「ホームビジットツアー」を再現していただき、記録した。これは、京都市内の「普通の人びと」の家を見学し、じかにその暮らしにふれるというツアーである。

貴重な時間をさいて話を聞かせてくださったり、こころよく資料を貸して下さった方に、改めてお礼申し上げたい。

3. 研究成果

以前から話を伺っていたジョー岡田氏に加え、H氏、S氏のライフヒストリーを収集できたことが、まず大きな成果である。

3人は同世代（昭和一ケタ生まれ）であるが、ガイドを始めた時期という点では、S氏が最も早い。「日本一のガイド」とまでいわれたS氏は、裕福な個人客の時代からジェット機による中流団体客の時代まで、第一線のガイドとして活躍し、80年代後半にガイドを引退した。S氏のインタビューによって、通訳ガイドから見た外国人観光客の変遷は、ほぼ明らかにできた。

ジョー岡田氏とH氏はほぼ同時期にガ

イドを始めているが、ジョー岡田氏がフリーで独自のツアーを企画し、70年代から80年代にかけて成功を収めたのに対し、H氏はJTBの専属ガイドを定年まで勤め、その後90年代半ばに京都で独自のウォーキング・ツアーを始め、『ロンリー・プラネット』に掲載されるまでに育て上げた。ジョー岡田氏が、円高による団体客の減少のため、ツアーを中止したのは、90年代初めのことであり、H氏はその後の個人客、とりわけバックパッカーが主流となった時代に、個人で参加できるウォーキング・ツアーで成功した。

このように見ると、3人は同世代ガイドの中できわめて特徴的な存在であり、彼らのライフヒストリーはユニークではあるが、そのユニークさのゆえに、戦後の外国人観光客の社会史を研究する準拠点となると考えられる。

また、それに続く世代であるT氏、A氏のライフヒストリーも、対比的に見てみると興味深い。T氏とA氏も同世代だが、T氏はフリーとして、A氏はJTB専属として活躍してきた。つまり、ジョー岡田氏、H氏、T氏、A氏の4人は、昭和一ケタ生まれと昭和20年代生まれ、エージェント専属とフリーという二つの軸で比較可能なものとして位置づけられるのである。

4. 今後の課題と発展

データの収集だけで研究期間が終わってしまったため、今後の課題はその分析である。「通訳ガイドの目から見た訪日外国人観光客の変容」と「通訳ガイドが伝えた日本像の検証」を中心に、今後も

研究を進めたい。

ただ、今回の研究の副産物について、以下にふれておきたいエピソードがある。

「ホームビジットツアー」を再現していただいたジョー岡田氏は、83歳（2012年6月現在）という高齢にもかかわらず、現在も通訳ガイドとして活躍されている。そのジョー岡田氏が、2012年5月から自分自身で京都市内のウォーキング・ツアーを開始することになったのである。これまでインタビューに協力していただいたという経緯もあり、下見や広報などツアーの立ち上げから私も協力しており、毎回のツアーにも同行し、データを収集している。今後もジョー岡田氏とこのツアーの動きを継続して見ていくことで、通訳ガイドの「実験観光社会学」的研究をおこなえるのではないかと考えている。

5. 発表論文リスト

現在のところなし。